第2部（研究発表1）
「学習者オートノミーと協力的学習をキーワードとした授業実践報告」

下 絵津子

1．はじめに

21世紀に入り，教育パラダイムは20世紀の「教え中心」から「学び中心」へとシフト―「学び中心型」の授業の重要性が認識され，学生・教師ともに意識の改革が必要な時期となった（小嶋，2006年9月）。

この新しい教育パラダイムにおいて，学習者オートノミー（自律性）を促進する学習環境づくりに関する様々な試みがなされている。近畿大学語学教育部が新カリキュラム検討委員会の中で議論した「近大Can-Do枠組み」も，自律した学習者の育成を目標の一つとして検討された。2008年度FD研究会では，その「学習者オートノミー」とそれを促進する鍵となる「協力的学習」をキーワードに，発表者の授業活動を報告した。ここでは，その概要と具体例を報告する。

2．学習者オートノミーと協力的学習

第二言語教育・学習における学習者オートノミーに関する文献では，学習者オートノミーを示す具体的な能力として次のような点が挙げられる（例：Holec, 1981；Wenden, 1991）：①目標を設定する能力，②学習計画を立てる能力，③学習材料を選択する能力，④学習過程を振り返る能力，⑤学習の進展振りを評価する能力。

「オートノミー（自律）」という言葉は，ともすれば「一人でする」つまり「独立(independence)」と混同されかねないが，これらは一致する概念ではない。Little (2004) は，自律とは自分の行為を自分で管理するということであるが，人間は社会の中で行動するものであり，自分の行動に責任を持つ能力は一人で伸ばしていくものではなく，人との関わり，交流の中で培っていくものである，と述べている。まさに，「オートノミー」は「協力」という概念と強いつながりがあるといえる。

「協力」という概念に関して，その必要性を否定する教育者は皆無といってもよいだろう。図1は語学教育における協力的活動の意義を示したものであるが，協力的活動のある教室

コミュニティでは，学習者が互いにアウトプットする機会があり，そこに意味交渉のあるインタラクションが起こり，互いにインプットも与え合うという環境が生まれる。学習者は人と話をして情報を交換しあうことでコミュニケーションの楽しさを感じる。協力的な雰囲気によってそのコミュニティはさらに積極的な相互交流の場となり，学習者は同じような背景を持つ学習者同士の中に，“Near Peer Role Models”（e.g., Dornyei & Murphey, 2003），つまり「身近なお手本」を見つけることができる。「身近なお手本」は，目標言語の母語話者のように「夢」のような目標ではなく，達成できそうな具体的目標を学習者に提供してくれる。

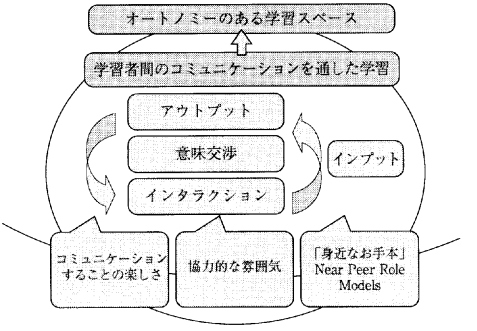


図１．語学教育における協力的学習の意義

それでは，どのような活動が協力的活動といえるのだろうか。グループ（ペアを含む）活動であれば，全ての活動が協力的活動になるかというと，そうではない。今井・野島（2003）でも指摘されているように，①共通の目標が欠けている，②「手抜き効果」が見られる，③同種の人だけのコラボレーションとなっている場合などは，グループ活動が効果的に作用しないため，全てのグループメンバーが活動に貢献する協力的活動とならない。協力的活動においては，例えば「司会者」，「時間係」，「報告係」，「記録係」，時として「褒め係」や「悪者係」などの役割を与えるなどの工夫によって，グループメンバーのそれぞれの役割を明確化する必要がある。あるいは，役割を与えなくとも，４人グループであれば１～４番の番号をそれぞれのメンバーに与え，活動終了後にＸ番の学生が活動内容を報告するといった形をとっても効果的だ。活動が終わった時点で何番の学生が報告するのかを決めると，メンバー全員が報告係になる可能性があるということで，全員が活動に熱心に取り組む傾向が見られる。より具体的な協力的学習の原理や教授テクニック・活動方法については，Johnson & Johnson（1999）や Jacobs, Power, & Loh（2002）などを参照されたい。

また，協力的活動と自律的学習を結ぶ活動として，「評価」，「内省」，「選択」を含む活動の重要性が指摘されよう。この3点は，学習者オートノミーの構成要素としても重要な行為であるが，自己評価やクラスメート評価，自分の学習を振り返る活動は，協力的活動を通してクラスメートと交流する中で多角的な視点が提供されることにより，より活性化されると考えられる。そして，選択理論心理学（自分自身で選ぶことにより，自分の行動に責任を持つようになるという考え）の視点から考えても，個人のレベルであってもグループのレベルであっても，活動に選択の幅を持たせ，グループにある程度の決定権を与えることで，学習者オートノミーが促進されるといえよう。協力しながら選択することで，話し合いの進め方や適切な妥協点の見出し方などの「協力的スキル」を習得することもできる。

3．教室活動例

上で述べたような，学習者オートノミーの重要要素と協力的活動の原理を考慮しながら計画した授業活動の例を紹介する。

① ニュースレターの制作（2008年度経営学部「ライティングB」）

② リスニング・ジャーナル及び学習記録シートの活用（2009年度農学部「TOEIC2/IB」

③ グループ発表（2009年度文芸学部「英語演習4」）

④ リーディング・ジャーナル（2008年度理工学部「英語演習1・2」文芸学部「英語演習2」）

①については，大学生活についてのニュースレターを作ることを課題とした。2人組みで行う活動で，少なくとも3人にインタビューした内容をもとに作成することとした。「大学生活」という大きなトピックは教科書で扱った章に関連するものだが，具体的な内容について（例えば，「大学食堂について」「ゼミについて」など）は，学生が選択・決定することができた。

②については，学生は，課題として自分で選んだ教材を利用したリスニングを行い，「リスニング・ジャーナル」として行った内容を記録した。最低限の課題への取り組み（週1回15分程度）で10点満点中6点，それ以上は回数・時間に応じて点数を与えるという仕組みをとり，授業には「リスニング・ジャーナル」を毎回持参し，クラスメートと交換しコメントを書きあうという作業をした。活動の点数は，学生本人が「Learning Records」の用紙（付録1）に記録した。この用紙はクラスによって黄または緑の用紙で用意しており，

毎回の授業で配布・回収しやすいものとした。また，毎回の授業の最初に小テストを行っていたが，そちらも自分の学習状況を自分でモニターするために，学生本人が同じ記録用紙に点数を記入しグラフを作成した。学習管理能力を伸ばし，目標設定・学習計画に役立ててほしい，また，ジャーナルを交換してコメントをもらうことで，互いに刺激を与えあってほしいというねらいがあった。

③については，「発表のガイドライン」（付録２）を授業内に配布し，活動の目的（これまでに学んだことを他の学生に伝える・授業で学んだことと関連する情報を調べてまとめ，他の学生に伝える）を学生に説明した。学生は発表のスタイルについて選択することができ（ニュースレターを利用した発表またはパワーポイントを利用した発表），発表で扱う章を教科書から自由に選択することとした。

④については，理工学部のクラスでは，学生は授業外活動として図書館等の多読本（Graded Readers）を読み，要約と感想を書いて授業に持参した。授業内では各班で活動の報告をしあい，その後，Travelling Heads（図２）を利用して，班の中で一番印象に残った本についてレポートするなどした。文芸学部のクラスでは週に１回，授業内に15分程多読活動を行ったが，「記録用紙」を用意して，学生が毎回同じ用紙に記録していく形をとった。②と同様に，自分で責任を持って学習を進める姿勢を養いたいというねらいがあった。そのほかにも，ペアで会話をつくり，ロール・プレイするなどの活動も取り入れたが，緊張感のレベルが低い小さいグループで何度も練習できるメリットを生かして，Carousal（図３）を利用するなどした。（これらのテクニックについては Jacobs, et al.（2002）を参照。）

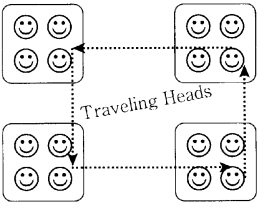


図２．Travelling Heads

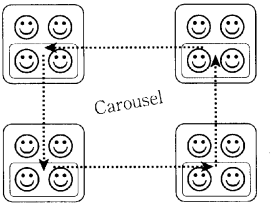


図３．Carousel

なお，これらの発表の際には，活動に合わせた「自己評価・クラスメート評価シート」を用意し，学生は互いに評価しあった。より集中して活動を観察するとともに，クラスメートから学ぶ機会を最大限に活用してほしいところだ。評価の観点を前もって学生に伝えることで，活動の目的達成度も上がると考えられ，また，その観点をもとに互いに評価しあうことで，自分の活動を振り返る際にもより客観的に評価することができるだろうと期待

した。

4．課題・問題点

授業活動に関するアンケート等をとってみると，協力的学習に関する学生の反応は比較的肯定的である。一方で，いくつかの問題点も指摘されよう。

まず，グループメンバー一人ひとりの責任を明確化させようと工夫しても，それがうまく作用しないこともある。発表当日にメンバーが休んでしまうということもあった。グループメンバー間の取り組みの差をいかに埋めるかはさらに検討していきたい問題である。次に，言語スキル，協力的スキル，そしてパワーポイントなどのツール運用スキルの授業で扱うべきバランスも配慮すべき点だ。これまでの学生の発表に際して，特に使用言語について十分なフィードバックが与えられたとはいえない。限られた授業時間を有効に使う工夫が必要だ。

また，どうしてもペアやグループで活動することに抵抗を示す学生もいる。あるTOEICの授業においては，TOEICの問題を解く作業を個別にしたいという希望が学生間に強く，教師が期待するほどに協力的活動がうまく作用しなかった。学生と教師の信頼関係を築くことは授業を進める上で基本となるので，学生の要望を考慮しつつ協力的活動の量を減らした経緯もあった。段階的なアプローチが有効な場面も多いだろう。授業の性質・目的と活動内容の整合性を今一度確認する必要もあろう。

最後に，ペアやグループで行った活動の評価についても課題が残る。これまでの活動では学生自身の自己評価は学習者オートノミーの促進を主な目的としてきたため，授業の評価点に考慮していない。教員の評価点と学生自身の自己・クラスメート評価の点数には同様の傾向が見られる印象ではあるが，これまで相関等の統計処理を行ってはいない。相関性を調べてみると，評価方法について得られる示唆もあろう。

これらの課題を検討しながら，今後も授業活動の改善に努めたい。

参考文献

今井むつみ・野島久雄（2003）『人が学ぶということ：認知学習論からの視点』北樹出版

小嶋英夫（2006年9月）「教員の授業力―求められる教員の資質能力」大学英語教育学会全国大会・授業学研究委員会特別企画6「授業学研究委員会最終報告：高等教育における英語授業の研究―授業実践例を中心に―」にて発表

Dornyei, Z., & Murphey, T. (2003). *Group dynamics in the language classroom*. Cambridge:

Cambridge University Press.

Holec, H. (1981). *Autonomy and foreign language learning*. Oxford: Pergamon Press.

Jacobs, G. M., Power, M. A., & Loh, W. I. (2002). *The teacher's source book for cooperative learning: Practical techniques, basic principles, and frequently asked questions*. Thousand Oaks, California: Corwin Press.

Johnson, D. W., & Johnson, R. T. (1999). *Learning together and alone*, fifth edition. Boston: Allyn and Bacon.

Little, D. (2004). Introductory thoughts on learner autonomy, *Learning Learning, JALT Learner Development SIG Newsletter 11* (2), 17-23.

Wenden, A. L. (1991). *Learners' strategies for learner autonomy: Planning and implementing learner training for language learners*. New York: Prentice Hall.

付録1 「TOEIC 2・1B」用学習記録用紙

TOEIC 2 / FALL 2008 (Instructor: Etsuko Shimo)

Learning Records

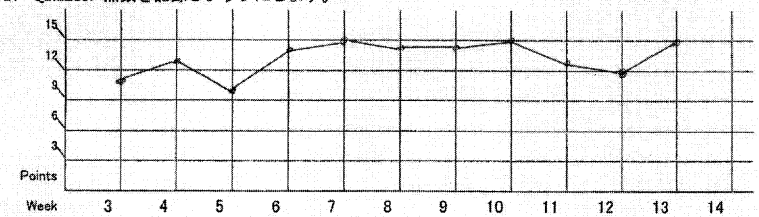
1. Listening Journal

以下の基準で点数を記録します。10分未満のときがあれば0.5回として数えます。

週に1回 =6点	週に3回=9点
週に2回=7点	週に3.5回以上=10点
週に2.5回=8点	

Week	Date	Points earned	Total points
Week 2	9 月 26 日	6	6
Week 3	10 月 3 日	7	13
Week 4	10 月 10 日	9	22
Week 5	10 月 17 日	9	31
Week 6	10 月 24 日	7	38
Week 7（提出）	10 月 31 日	7	45
Week 8	11 月 7 日	7	52
Week 9	11 月 14 日	9	61
Week 10	11 月 21 日	9	70
Week 11	11 月 28 日	9	79
Week 12	12 月 5 日	9	88
Week 13（提出）	12 月 12 日	10	98

2. Quizzes: 点数を記録しグラフにします。



Week	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
Date	10/3	10/10	10/17	10/24	10/31	11/7	11/14	11/21	11/28	12/5	12/12	
Points	11	13	10	14	15	14	14	15	13	12	15	

Student # _____ Name Sample

付録２ 「英語演習４」用プリント：グループ発表についてのガイドライン

English Seminar 4: Etsuko Shimo **Group Presentation Guidelines**

- Choose either Task A or Task B. You are to make presentations twice this semester.
- It's OK to choose the same type of Task on both presentation days.
- Presentation Day - Week 7: November 17
  - Week 12: December 24
- Grade - Each presentation will be considered as 10 % of the course grade: 20 % of the grade will be given based on the two presentations.
- Objectives
  - ✧ To share and recycle what you have learned through this course with your classmates.
  - ✧ To search, collect, and share information related to what you have learned in class (by making use of the Internet or books, etc.) with your classmates.

これまで扱った Chapter から１つ選びます。やる内容は２つ。
① Chapter の内容を簡単にまとめて報告します。
② さらに（ここが重要！！！）、関連する情報を調べて、その内容を発表します！
☆☆ **2～4 人のグループで作成します** ☆☆

Task A: Power Point Presentation

Minimum requirements

1. It's an English presentation! You can use a few Japanese words here and there if you think they help, but make sure you make an English presentation!
2. **Each member** has to make at least four slides and **speak at least two minutes**. If there are two people in your group, the presentation should consist of at least eight slides and should be at least four minutes long. 誰がどこを担当したかが分かるように、スライド担当者の名前を明記したスライドも一つ用意します。ただし、これは発表スライドの数に数えません。
3. 実際の発表はパソコンを使ってします！必ずメンバー全員が話します☺

Task B: Group Newsletter Creation

Minimum requirements

1. It's an English newsletter! You can use a few Japanese words here and there if you think they help, but make sure you make an English newsletter!
2. The newsletter has to be at least A4 per person. If there are two people in your group, it has to be at least A3 one page. Each member has to contribute at least one article in the newsletter. Also, in the presentation, **each member** should speak **at least two minutes** (cf. Task A). 誰がどこを担当したかが分かるように、記事の後に名前を入れるなど工夫をしましょう。
3. 実際の発表は OHC を利用して行います。ただし、全員（19 名分）のコピーを用意しておくこと。必ず全員が話します☺ ➔ 1 回目は 11 月 12 日（水）、2 回目は 12 月 17 日（水）までに 11 号館の 308 研究室まで提出した場合には、しもが印刷します。

	Chapter	タスクの種類	あなたの分担内容
1 回目 11/17			
2 回目 12/24			